

1. はじめに

平成 25 年 6 月の三週間、母校である高等学校において英語科で教育実習を行わせて頂いた。2 学年を担当し、難関私立大学や国公立への進学を希望する特別選抜クラスや、中堅私立大学への進学を目指す特別進学クラスなど、三クラスで授業実習を行い、授業実習時間数は計 22 時間となった。実習期間中には、他コースの授業見学にも行かせて頂き、学力の差やクラスの色の違いを明確に感じることができた、非常に充実した三週間であった。

今回の教育実習を通して、主に以下の四点を学んだ。一つ目は、「授業は決して計画通りに進まない、生き物のような物である」ということ。二つ目は、「自分が理解している事と、生徒に教え、理解させる事は異なる」ということ。三つ目は、「熱意を持って接すれば、必ず思いは伝わる」ということ。そして最後に、「机上で学んできた事と、現場には大きな差がある」ということである。本報告書では、この四点をもとに、今回の教育実習において何を学び取ったのか、そして教育実習とは何かを報告する。

2. 教育実習を通し、学んだこと

(1) 授業は決して計画通りに進まない、生き物のような物である

授業実習にあたり、事前にしっかりと教材研究を行い、授業計画を立て、実習に臨んだ。しかし、実際に教壇に立ち、授業を進めると、計画は思い通りに進まないということを感じさせられた。

例えば、生徒の中には遅刻する者や授業を受ける姿勢が整っていない者、授業開始後すぐに眠る者もいた。また、自分の力量不足もあり、文法や文の構造の説明に時間を取ってしまう事や、アイスブレイクとして入れたつもりの雑談が思っている以上に広がってしまう事などがあった。さらには、同じクラスであっても、日によって雰囲気も異なることも多い為、生徒の様子を随時伺いながら、進行速度を調節する必要もあった。

これらの事から、クラスや生徒の表情は毎回の如く異なり、一度として同じ授業はないと学んだ。だからこそ、教師にはそれに対応できる柔軟性や優れた観察力が必要とされており、これらの能力を最大限に発揮することではじめて教師の目指す授業が成立していくのだと考える。

(2) 自分が理解している事と、生徒に教え、理解させる事は異なる

文法や文の構造など重要表現を説明する際に、生徒からそれについて質問される事が多々あり、特に、多くの学生にとって理解するのが難しい、時制や分詞構文などを含んだ文章に関しては、質問する生徒の数が顕著に多くなった。

生徒に教え、理解させる際には、簡単な言葉で端的に説明し、時制などはグラフを使

用する事で、時間の移り変わりが明確になるような工夫を行う事が必要であると学んだ。教師は、生徒達の「理解したい」という気持ち、つまりは相手が求める物に対して、様々な工夫をしながら応えていく役割を担っていると考える。この点から、教師の仕事は、生徒の気持ちやニーズを的確に汲み取り、それに対応していくことが求められており、コミュニケーション能力が最大限に必要とされる職業なのではないかと考える。

さらには、授業中に生徒のどんな質問にでも答えられるよう、万全の教材研究と事前の準備が必要である事も学んだ。生徒は、教師が自分の質問に曖昧に答える事や自信の無いような素振りや返答をすぐに感じ取り、それに応じて自らも不安になるという事を指導教諭から教わった。だから、自信を持って堂々と授業を行えるよう、万全の教材研究と事前準備が必要不可欠であり、これが彼らの深い理解へと繋がっていく近道になるのだと考える。

(3) 熱意を持って接すれば、必ず思いは伝わる

当初、どのように生徒と関われば良いのか戸惑っていた際に、指導教諭から「自分の殻を破り、当たって砕けるくらいの気持ちで関わりなさい」との助言を頂いた。その助言を基に、休み時間や授業中に、積極的に生徒に声をかけることでコミュニケーションを取る機会を増やすように心掛けたところ、想像以上に心の距離を縮めることが出来た。また、授業実習に関しても、説明や質問に対する返答は上手ではなかったと思うが、授業後生徒に書いてもらった、感想カードには「分かりやすく、面白い授業であった」や「来年教師として戻ってきて、英語の授業を担当して欲しい」などの嬉しいコメントが多くあった。授業中は、本当に理解してもらえるのかなどの不安はあったが、「皆に理解して欲しい」という強い気持ちを持ちながら授業を行った結果、その熱意がしっかりと生徒に伝わっていた事が分かり、大変嬉しく感じた。この経験から、教師の仕事におけるやりがいを感じることも出来た。

(4) 机上で学んできた事と、現場には大きな差がある

教科教育法などの講義で、何度か模擬授業を行い、理想の教科指導や生徒指導についても学んできた。その為実習期間中には、大学の授業で学んだ様々な事を参考に、取り組もうと心掛けていた。しかし、実習を通して、実際の教育現場は大学で学んできた事と大きな差がある事を学んだ。

例えば、大学において模擬授業を行った際には、生徒役は大学生である為、静かにこちらを向き、耳を傾け、時間内に計画した物を全て終える事ができる。しかし現場では、号令の際に服装が整っているのか、遅刻者はいるのかを確認する必要があった。また、授業の進行速度や説明方法もクラスによって変えなければならず、授業内には教科に関係のない質問などもあり、模擬授業とは大きく異なるものであった。さらには、宿題をしていない者や忘れ物をする者があり、授業が中断してしまう時もあった。また、生徒

の学力の低さを感じる事も多々あった。中学生レベルの単語や熟語、品詞の種類さえ理解出来ていない者など、基礎学力の低い生徒が多々見られた。

大学の授業の中では、今日の教育現場で生徒の学力低下が叫ばれているといった内容について学んできたが、実習を通して、初めて痛感する事ができた。英語は、日々の積み重ねで学んでいく教科である為、高等学校での学びをそれだけにするのではなく、小学校・中学校との連携などを通じ、一貫した学びを提供し続ける必要があるのではないかと考える。今回の実習を通して、実際の教育現場を垣間見ることができ、机上の学びとは異なる事を経験し、教育者の道に進むにあたり、非常に有意義な時間となった。

3. 教育実習とは何か

教育実習が私にもたらした物とは、授業実習や生徒そして先生方との関わりを通じて、人間関係の築き方や社会人としての在り方を深く見つめ直す事であったと考える。

実習期間中は、ホームルームクラスと授業を担当していたクラスの生徒となるべく関わりを持つよう努めた。休み時間に自ら話しかけ、他愛もない会話をし、掃除や放課後の時間を利用して、ゆっくり話す時間を作るよう工夫した。また、指導教諭以外の先生方に対しても、積極的にコミュニケーションを図り、より多くの事を学び得よう努力した。日々の業務を精一杯行うことで人間関係を構築し、仕事のやりがいや苦勞した事など今後の進路の参考になる貴重なお話を伺うことができた。さらに、疑問点があればその日中に伺うなどし、真摯な態度で接する事で、信頼関係を築き上げていった。

また、校内における自分の態度にも一層の注意を払いながら過ごした。生徒にとって、教師は手本となるような存在でなければならず、言葉遣いや行動に責任を持って取り組んだ。先生方に対しても、お忙しい中教えて頂いているという感謝の気持ちを忘れず、行動するよう努めた。

大学内での人間関係では、互いがおおむね同じような価値観を持っていることが多かったのに対し、教育現場では様々な価値観を持つ生徒たちと、一から人間関係を築き上げる必要があったために、実習を通して改めて人間関係を築き上げていくことの難しさを実感することとなった。また、学生目線ではなく、一人の社会人としての自覚を持ち、自分自身の言動に責任を持って行動することが求められた三週間でもあり、卒業後に社会に出るに当たっても役立つに違いない経験をする事ができた。

4. まとめ

三週間という教育実習における授業実習や生徒指導、またそれに伴う生徒・先生方との関わりを通じ、主に次の四点を学んだ。一つ目は、「授業は決して計画通りに進まない、生き物のような物である」ということ。二つ目は、「自分が理解している事と、生徒に教え、理解させる事は異なる」ということ。三つ目は、「熱意を持って接すれば、必ず思いは伝わる」ということ。そして最後に、「机上で学んできた事と、現場には大

きな差がある」ということである。実際の教育現場は模擬授業とは全く異なるもので、計画通りにはいかず、試行錯誤を繰り返すものであった。しかし、「生徒の心に近づきたい、理解してもらいたい」という熱意を忘れず、取り組めば、必ずその思いは伝わるということも、実習を進めていく中で学ぶことができた。

教育実習とは、人間関係の築き方や社会人としての在り方を深く見つめ直す貴重な場でもあったと考える。大学生活の中で、これほどまでに充実し、学び得る事が多かった時間は無かった。それと共に、幼い頃からの夢であった、教師になりたいという気持ちを一層強くした三週間でもあった。

この実習を通し、学び得た事を、自分の成長の糧とし、残りの大学生活と将来に活かしていく事こそが、実習を受け入れて下さった母校とお世話になった先生方や、向き合ってくれた生徒たちへの一番の恩返しになると考え、今後も努力を惜しまず、励み続けたいと考える。